

## 日曜地質巡検会記事

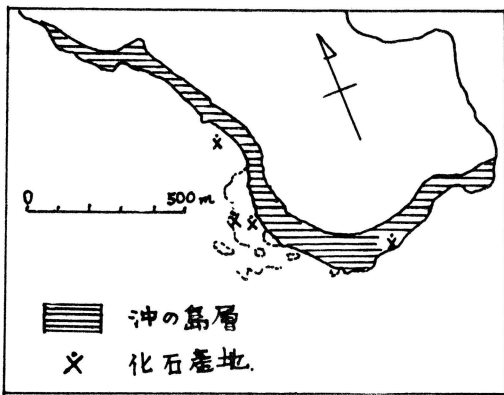
第51回(昭和44年11月23日沖の島層の化石の産状)

### 長崎南西部(2万5千万の1)

長崎西高等学校 石川直衛

新装なった大波止のターミナルに集合、9時出航の船で伊王島に渡った。島についた一行は冷たい潮風が吹く棧橋付近に集合し、コース、日程を確認したうえで出発した。

この日の巡検は県北地域の予定であったが、都合により急遽変更されたものなので、参加者の数が危ぶまれたが30名程の参加があり、特に長崎市内の高校生の参加が多く若さに満ちた巡検会となった。



沖の島南部 沖の島層分布図

沖の島の商店街を通り、トンネルを通り抜けたところで露出している砂岩層について説明があったが観察は略した。馬込の教会の近くに砂岩層の小露头があるが、説明によると顕微鏡下で、この砂岩中にウニのトゲなどが見られるとのことで、海成のものであることがわかる。

沖の島の南東岸—南岸—西岸と続く海岸一帯は断崖をなしているが、露出は極めて良好である。ただし、走向 $N60^{\circ}E$ 、傾斜 $N20^{\circ}\sim 30^{\circ}$ の関係から、露出している地層は沖の島層最上部と伊王島最下部のおもに礫岩部だけに限られている。

人家がなくなって第1の岬を廻ったあたりの上水道の揚陸地点付近で、石灰質の遺骸が含まれている砂岩礫が採集できるので、一同それらしいものを捜した。この付近の岩相は粗粒砂岩からしだいに細～中礫岩になっていて、結晶片岩礫や石英礫に混じて炭化物や *Teredo* sp. (フナクイ虫の類) を含む礫がかなり良く観察される。さらに最下部の礫岩も露出している。この礫岩は井崎礫岩とよばれていて、厚さ約20m、炭化物は含まれずおもに結晶片岩礫からなっている。

第2の岬(すなわち南東端でもっとも香焼島に近接している地点)あたりから沖の島層の暗灰色頁岩・砂岩に移行している。南端の少し手前で本格的に化石採集にかかった。今回の巡検の第1の目標は、沖の島層中に含まれている *Hautlroid* (オオム貝) の化石を見つけることであり、本地点から産出したことが記されているので、一同血眼になって捜し廻った。この地層中には、ノジュールが多くてよくだまされていた。捜すこと数10分、ついにオオム貝の化石第1号は鎌田先生によって発掘された。また、さらに *Pitar kyushuensis* (NAGAO) (二枚貝の一種) の良

い化石標本が産出するので、皆よろこんで採集し、時間の経過が気にならなかったが腹の虫が治まらないので、その地点から少し東に進んだ地点で昼食をとった。食後は一同車坐になり、例によって自己紹介をやり、今後の活動予定の話し合い、さらに腰カバン宣伝等が終わって午後の活動を開始した。

島の南西端には沖の島層の砂岩・泥岩が広く露出していて、一見「鬼の洗濯板」に似ている通称「あぜ」という地点で思い思いに散らばって、オオム貝の化石や二枚貝の *Venericardia nipponica* YOKOYAMA などの化石採集をおこなった。この日の潮風は予想外に冷たかったが、折から大潮の干潮時で、広く現われている海岸を皆元気に捜し廻った。

沖の島産のオオム貝 (*Eutrophocaras*

*japonicum* (SHIMIZU)) の化石は、同一層から17個産出したことが小林貞一博士(東大名誉教授)・鎌田泰彦博士(長大助教授)により記名されて(雲仙・長崎の自然にも紹介されている)以来、長崎市内高校地学部の手により10数個採集されているので、なお産出する可能性はあるわけであり、当日の収穫が期待されていた。果せるかな当日合計8個(もっとも完全形のはほとんどなかったが)が採集されて初期の目的は充分達せられた。

当日までに採集された標本の産出地点の再確認が終わってから現地を離れ、山越えをして棧橋に向かった。16時出航の船で帰崎、心配された雨も降らず好天気の中で気持ちの良い巡検を終ることができた。(参加者32名)